



宇宙に恋して… エジプトの女科学者の物語

松本 侑壬子・ジャーナリスト

4世紀、エジプト・アレクサンドリアの街にヒュパティアという女性天文学者がいた。彼女は同時に数学者、哲学者でもあり、多くの弟子たちに慕われていた一知られざる実在の人物である。本作は、歴史を掘り起こし、時代の転換期に絶対の平和を求めて誇り高く生き、信念に殉じた女性科学者の、短くも不屈の生涯を描く。

ローマ帝国末期。世界の文化と学問の中心地アレクサンドリアにも、帝国崩壊寸前の混戦が迫っていた。美貌と明晰な頭脳を併せもつヒュパティア（レイチェル・ワイズ）は、今日も大理石の階段に座った若者らを前に、天文学の講義を行っていた。彼女を見上げる若者たちの中には、彼女に堂々と求愛するもの、秘かに憧れを抑えようと苦しむ者がいた。だが彼女は恋文の返事に自分の経血のついた絹のハンカチを渡し、誰のものにもならぬと公言するのだ。

アレクサンドリアの最後の図書館長の娘であるヒュパティアは、宇宙の謎を解明する研究に没頭し、一生を（独身のまま）哲学に捧げたい、と願う。図書館のパピルス（古代の紙）の巻物の蔵書、精密な天体模型などに囲まれ、月や星や太陽の軌道について考える研究生活が無上の喜び。だが、それは、当時では男にしか許されぬ人生であった。彼女の学問への情熱、平和を願う心、自立の精神は、社会の混乱の中でも揺る

がないが、思いがけないところから、一気に悲劇への歯車が回り始める…。「何が起きようと、私たちは兄弟なのです」との彼女の声は、やがて起こる騒乱の中にかき消されてしまう。

古代ローマの衣装に身を包んだ貴族の男女、甲冑に身を固めたローマ軍の兵士、広場を埋める群衆、そして始まる激しい戦闘…。ヨーロッパ映画史上最大の製作費をかけて撮影したアレクサンドリアの崩壊の様子は、「まるでCNNでニュース速報を見るような緊迫感」を狙ったと言う。アメナーバル監督は、文明の象徴の街が破壊されたのは、「さまざまな派閥の争い、特に宗教的派閥争いが主な原因であり、それは現代に通じている」とみる。

画面では、特にユダヤ教徒や“異教徒”と対立するキリスト教宗徒の集団が眼を引く。全身黒づくめの鋭い目つきで風のように襲ってくる。不満をもつ民衆の心を掴み、広場を埋め尽くすデモを組織し混乱を招く、攻撃的な力の集団といった描き方だ。聖書のエピソードに基づく過去の歴史大作映画の、受難を乗り越え、神に導かれて新天地に向かう善良なる神の民、といった古代キリスト教徒の姿とは全く異なる。むしろ現代の、伝えられるイスラム原理主義者集団や世界各地の極右勢力の姿を連想させる。

ヒュパティアの弟子の間にも論争が起こり、キリスト教入信を受け入れる者が続々。そして、ついに信念を曲げないヒュパティアは「魔女」として捕えられ処刑の命令が下る。愛と宗教の狭間で弟子のとった最後の決断とは一。

古代ローマ時代の壮大な歴史劇だが、人間ドラマとしては、確かに現代と多くの繋がりがあることを考えさせられる。そして、能力あり誇りも志も高いヒュパティアの悲劇についても。

『アレクサンドリア』

スペイン映画（127分）／アレハンドロ・アメナーバル監督

3月5日（土）より、丸の内ピカデリー他全国順次公開

©2009 MOD Producciones, S.L. ALL Rights Reserved.

